

学校支援地域本部事業の取り組み成果にみる

学校・地域間関係の再編 (その2)

—生徒, 地域ボランティア, 教師の意識調査から—

大久保 智生・時岡 晴美・平田 俊治*・福圓 良子**・江村 早紀***
(学校教育講座) (人間環境教育) (赤坂中学校) (備前中学校学校支援地域本部) (大学院教育学研究科)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*701-2222 岡山県赤磐市町苅田425-1 赤坂中学校

**705-0001 岡山県備前市伊部1857 備前中学校学校支援地域本部

***760-8522 高松市幸町1-1 香川大学大学院教育学研究科

Reorganization of School and Community Relationships Focusing on the Result of the Project for a “Regional Center to Support Schools” (No.2): From the Investigation of students', volunteers' and teachers' consciousness

Tomoo Okubo, Harumi Tokioka, Syunji Hirata*, Yoshiko Fukuen** and
Saki Emura***

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Akasaka Junior High School, 425-1 Machikanda, Akaiwa 701-2222*

***Regional Center to Support Schools of Bizen Junior High School, 1857 Inbe, Bizen 705-0001*

****Graduate School of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要 旨 本研究では、学校支援地域本部事業の取り組みの成果について、生徒・地域ボランティア・教師の意識調査を通して、学校と地域にどのような変化が起きたのかを検討した。分析の結果、学校の荒れが収束し、地域住民の意識に変化がみられた。また、地域ボランティアと教師の意識に差がみられたことから、地域ボランティアと教師の間に温度差があることが明らかになり、今後、事業を効果的に進めていくための示唆が得られた。

キーワード 学校支援地域本部 意識調査 学校の荒れ

問題と目的

近年、学校の荒れや学級崩壊などの問題行動

の継続化が大きな社会問題となってきている。加藤・大久保(2004, 2009)が指摘しているように、学校が荒れた際には教師が指導のあり方

を見直すことが必要である（大久保，2009）。しかし、教師は日々の様々な問題に対処し続けていく中で疲弊していることから、地域の教育力を活用することも視野に入れる必要がある。本研究では、「その1」（時岡・大久保・平田・福圓・江村，2011）に引き続き、地域の教育力という意味で学校支援地域本部事業に焦点を当て、荒れていた中学校に地域住民が関わることで学校と地域にどのような変化が起きたのかについて多面的な意識調査を通して検討していく。

学校支援地域本部事業とは、平成20年より始まった文部科学省の委託事業であり、学校が必要とする活動について地域住民をボランティアとして派遣する事業で、そのためにコーディネーターを中心とする組織を整備するものである。いわば地域に学校の応援団を作る試みであり、従来の学校支援ボランティア活動を発展させた組織的なもので、より効果的に学校支援を行うために設置されるものである。平成20年度に、867市町村で2176の地域本部が立ち上げられており、この事業を契機として学校・地域間関係の再編に取り組むことで両者のエンパワーメントを図りたいという期待がみとれる（時岡・大久保・平田・福圓・江村，2011）

最近では、学校支援地域本部事業についての研究（例えば、本迫，2009；中川・山崎・深尾，2010；荻野，2010）が行われてきており、この事業によって学校と地域が活性化されることなどが明らかとなっている。しかし、荒れた学校において学校支援地域本部事業を行い、学校や地域が変化した事例を詳細に検討した研究は見受けられない。学校が荒れた場合、教師には非常に負担がかかることから地域の教育力に活路を見出すという対策も今後求められるようになるだろう。学校の荒れの対策として、加藤・大久保（2009）は学校を地域住民の協力を得るために積極的に公開していくことを挙げているが、どのように地域に学校を公開していくのかについては言及していない。したがって、地域に学校を公開する事業として、学校支援地域本部事業を取り上げ、地域住民の学校への関わり

方とその影響について多面的に検討していく。

以上を踏まえ、本研究では、荒れている中学校の学校支援地域本部事業の取り組み成果について、生徒・地域ボランティア・教師の意識調査を通して、学校と地域にどのような変化が起きたのかについて検討することを目的とする。

具体的には、まず、学校の荒れと学級の荒れの観点から学校の変化に注目し検討する。次に、学校支援地域本部事業は、単に学校の変化のみでなく、地域の変化も引き起こす事業といえるため、学校支援地域本部事業に地域住民が参加したことでどのように地域住民の意識が変化したのかについて検討する。最後に、学校と地域の変化を引き起こす学校支援本部事業について、実際に学校を支援する側の地域ボランティアと支援される側の学校の教師の意識を比較することで、今後、どのように進めていく必要があるのかを検討する。

方法

調査対象校と調査対象者

学校の荒れが問題となっている中で、平成21年度に学校支援地域本部事業を本格実施した岡山県の備前市立備前中学校を調査対象校とした。調査の前に行った地域住民や教師のインタビューから、備前中学校は典型的な荒れている学校であったといえる。そして、備前中学校の協力のもと、平成22年の2月から3月にかけて、備前中学校の生徒425名（男子210名、女子213名、不明2名）、地域ボランティア102名（男性44名、女性53名、不明5名）、教師29名（男性16名、女性13名）に対して質問紙調査を実施した。

生徒用質問紙の構成

①学校の荒れ：深谷・三枝（2000）を参考に加藤・大久保（2005）が作成した尺度12項目に対し、「あなたの学校では、以下のようなことがどれくらい起きていますか」という指示のもと、「ぜんぜんない」（1点）から「とてもある」（4点）までの4件法で回答してもらった。

②学級の荒れ：深谷・三枝（2000）を参考に作成した尺度10項目に対し、「あなたのクラスでは授業中、以下のようなことがどれくらいありますか」という教示のもと、「ぜんぜんない」（1点）から「とてもある」（4点）までの4件法で答えてもらった。

地域ボランティア用質問紙の構成

①ボランティア参加による変化：ボランティアに参加してどのように変化したかについて尋ねた。「今回の学校支援地域本部事業に参加してどのように思われましたか」という教示のもと「まったく思わない」（1点）から「たいへんそう思う」（4点）までの4件法で答えてもらった。

②学校への期待：地域の人たちが何を学校に期待しているかについて尋ねた。生徒指導、学習指導、進路指導、部活動指導、危機管理、地域との連携の6つの側面に対して、「あなたの地域の学校に何を期待していますか」という教示のもと、「やらなくてよい」（1点）から「やってほしい」（4点）の4件法で答えてもらった。

③学校への評価：学校に対してどのように認知しているのかについて尋ねた。「あなたの地域の学校に対してどのように思っていますか」という教示のもと、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（4点）の4件法で答えてもらった。

④参加したボランティアへの評価：参加したボランティアに満足しているのかについて尋ねた。まず、1. 読み聞かせ、2. 登下校安全、3. 環境整備、4. 学習支援、5. 部活動支援、6. ゲストティーチャー・地域や学校行事の支援という6つのうち、どのボランティアに参加したのかを答えてもらい、「ボランティアは学校や生徒にどの程度満足しましたか」という教示のもと、「満足していない」（1点）から「満足している」（4点）の4件法で答えてもらった。

⑤学校の取り組みへの認知：学校の取り組みをどの程度認知しているのかについて尋ねた。29名の教師の自由記述を参考に、生徒指導、学

習指導、進路指導、部活動指導、危機管理、地域との連携の6つの側面について42項目を作成した。これに対して、「あなたの地域の学校は以下の取り組みを行っていますか」という教示のもと、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（4点）の4件法で答えてもらった。

教師用質問紙の構成

①地域の学校への期待：地域の人たちが何を学校に期待しているかについて尋ねた。生徒指導、学習指導、進路指導、部活動指導、危機管理、地域との連携の6つの側面に対して、「地域はこの学校に何を期待していると思いますか」という教示のもと、「期待していない」（1点）から「期待している」（4点）の4件法で答えてもらった。

②学校への評価：学校に対してどのように認知しているのかについて尋ねた。「あなたのお勤めになっている学校に対してどのように思っていますか」という教示のもと、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（4点）の4件法で答えてもらった。

③ボランティアへの評価：ボランティアが役立っているのかについて尋ねた。1. 読み聞かせ、2. 登下校安全、3. 環境整備、4. 学習支援、5. 部活動支援、6. ゲストティーチャー・地域や学校行事の支援の6つのボランティアに対して、「今回の学校支援地域本部事業のボランティアは学校や生徒に役立っていると思いますか」という教示のもと、「役立っていない」（1点）から「役立っている」（4点）の4件法で答えてもらった。

④学校の取り組みへの認知：学校の取り組みをどの程度認知しているのかについて尋ねた。地域ボランティア用質問紙で使用した42項目に対して、「あなたの学校は以下の取り組みを行っていますか」という教示のもと、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（4点）の4件法で答えてもらった。

結果と考察

学校の変化について

学校の変化について検討するため、備前中学校の学校の荒れおよび学級の荒れの得点の平均を算出した。その結果を、Figure 1とFigure 2に示す。備前中学校の学校の荒れ得点の平均は2.18であり、学級の荒れ得点は2.31であった。そして、加藤・大久保（2009）や大久保・加藤（2008）の調査に参加した学校との比較を行うため、学校を独立変数とし、学校の荒れ、学級の荒れを従属変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、備前中学校は、他の中学と比較して、学校の荒れ、学級の荒れともに高い

数値ではないことが明らかとなった。

以上の結果から、現在では、備前中学校の学校の荒れ、学級の荒れは収束しているといえる。同じ質問項目を用いた調査の結果と比べて、現在の備前中学校の学校や学級の荒れの程度は、荒れている学校というよりも落ち着いている学校とっていいくらいの数値になっており、少なくとも、数値の上からは荒れの収束した学校といえる。

地域住民のボランティア参加による変化について

ボランティア参加による変化の11項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を

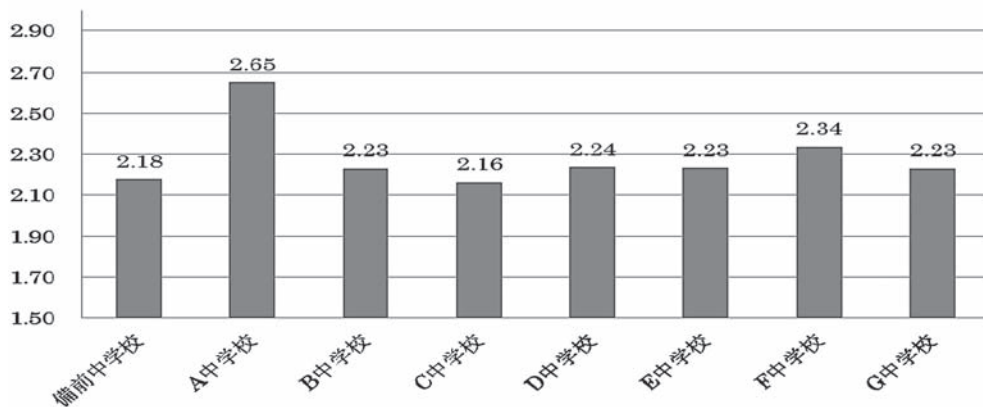


Figure 1 備前中学校と他校の学校の荒れ得点

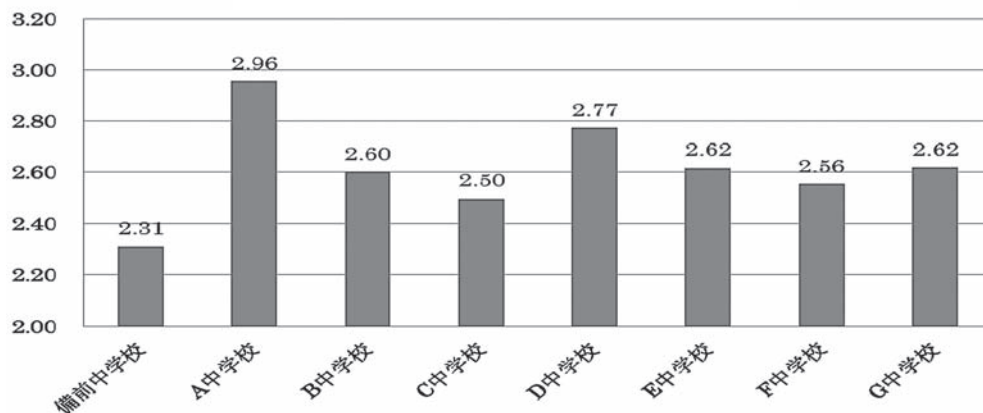


Figure 2 備前中学校と他校の学級の荒れ得点

行なった。その結果をTable 1に示す。因子付加量の絶対値.400以上を示した項目を基準に、3因子10項目を採用した。第1因子は「中学生が元気になった」「住民との話題になった」など、ボランティア参加によって地域と中学生が変化したことを表す項目からなっているので、「地域と中学生の変化」と解釈した。第2因子は、「今後も続けて欲しい」「良い企画である」など、今後も企画を推進してほしいことを表す項目からなっているので、「企画の推進」と解釈した。第3因子は、「楽しんで参加した」「負担に感じられた（逆転項目）」など、ボランティア参加によって地域住民がポジティブな影響を受けたことを表す項目からなっているので、「参加のポジティブな効果」と解釈した。

尺度の信頼性を求めたところ、クロンバックの α 係数は、第1因子が.719、第2因子が.775、第3因子が.666であった。したがって、第3因子の値が若干低い、内的整合性の観点からの

信頼性が確認された。なお、各因子に含まれる項目の得点の合計を項目数で割り、それぞれ「地域と中学生の変化」得点、「企画の推進」得点、「参加のポジティブな効果」得点とした。

ボランティア参加による変化について検討するため、尺度の平均と標準偏差を算出した。その結果をTable 2に示す。「地域と中学生の変化」得点が2.579であり、「企画の推進」得点が3.371であり、「参加のポジティブな効果」得点が3.000であった。この結果から、地域ボランティアは地域と中学生が変化したと考え、本事業の企画の推進を願い、ボランティア参加によってポジティブな効果があると考えていることが示唆された。このように、本事業は地域住民にとって肯定的な変化を起こすものであるといえる。

ボランティア参加による変化についての性差を検討するために、ボランティア参加による変化の得点を従属変数とし、性別を独立変数とし

Table 1 ボランティア参加による変化の因子分析結果

〈項目〉	因子負荷量		
	I	II	III
I 地域と中学生の変化 ($\alpha = .719$)			
中学生が元気になった	.789	-.211	.138
住民との話題になった	.701	.070	-.176
地域が良くなった	.623	.125	-.128
家族でよく話題にした	.437	.125	.100
II 企画の推進 ($\alpha = .775$)			
今後も続けて欲しい	-.064	.788	.178
良い企画である	.047	.730	.073
参加者を増やして欲しい	.031	.702	-.214
III 参加のポジティブな効果 ($\alpha = .666$)			
楽しんで参加した	-.120	-.045	.771
負担に感じられた (R)	.040	.073	-.654
自分達が元気になった	.286	.105	.499
	因子間相関	I	II
		II	.526
		III	.532
			.592

(R) は逆転項目

Table 2 ボランティア参加による変化の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
地域と中学生の変化	2.579	.543
企画の推進	3.371	.576
参加のポジティブな効果	3.000	.573

Table 3 性別ごとのボランティア参加による変化の平均値と t 検定の結果

	男性 (N=40)	女性 (N=49)	t 値
地域と中学生の変化	2.500 (.531)	2.640 (.551)	1.096
企画の推進	3.317 (.560)	3.415 (.591)	.799
参加のポジティブな効果	2.851 (.604)	3.121 (.522)	2.208*

df=87 カッコ内は標準偏差

*p<.05

Table 4 年齢ごとのボランティア参加による変化の平均値と分散分析結果

	59歳まで (N=28)	60歳代 (N=37)	70歳以降 (N=23)	F値
地域と中学生の変化	2.630 (.614)	2.580 (.514)	2.530 (.491)	.177
企画の推進	3.571 (.479)	3.270 (.628)	3.319 (.555)	2.438
参加のポジティブな効果	3.012 (.517)	3.057 (.602)	2.937 (.583)	.746

カッコ内は標準偏差

Table 5 ボランティア参加による変化と学校への期待との相関

	地域と中学生の変化	企画の推進	参加のポジティブな 効果
生徒指導への期待	.113	.097	.066
学習指導への期待	-.031	.194	.099
進路指導への期待	.019	.126	.080
部活動への期待	.159	.288**	.180
危機管理への期待	.267*	.244*	.231*
地域との連携への期待	.045	.360**	.243*

**p<.01 *p<.05

た t 検定を行った。その結果を Table 3 に示す。参加のポジティブな効果において女性のほうが男性よりも有意に得点が高かった ($t=2.208$, $df=87$, $p<.05$)。このことから、女性のほうが地域ボランティアに参加によってポジティブな影響を感じていることが示された。

ボランティア参加による変化についての年齢差を検討するために、ボランティア参加による変化の得点を従属変数とし、年齢(「59歳まで」, 「60歳代」, 「70歳以降」)を独立変数とした分散分析を行った。その結果を Table 4 に示す。年齢による差は認められなかった。このことから、ボランティアの年齢による変化の違いはないことが示された。

ボランティア参加による変化と学校への期待の関連を検討するため、ピアソンの相関係数を算出した。その結果を Table 5 に示す。「地域と中学生の変化」と「危機管理への期待」($r=.267$, $p<.05$)の間に有意な正の関連が認め

られた。また、「企画の推進」と「部活動への期待」($r=.288$, $p<.01$)、「危機管理への期待」($r=.244$, $p<.05$)、「地域との連携への期待」($r=.360$, $p<.01$)の間に有意な正の関連が認められた。「参加のポジティブな効果」と「危機管理への期待」($r=.231$, $p<.05$)、「地域との連携への期待」($r=.243$, $p<.05$)の間に有意な正の関連が認められた。以上の結果から、地域と中学生の変化を感じている者ほど、危機管理に期待していることが明らかとなった。また、企画の推進を願っている者ほど、部活動と危機管理、地域との連携に期待していることが明らかとなった。参加のポジティブな効果を感じている者ほど、危機管理と地域との連携に期待していることが明らかとなった。したがって、ボランティア参加による変化を感じている者ほど、学校に対して期待をしているといえる。

Table 6 ボランティア参加による変化と学校への評価との相関

	地域と中学生の変化	企画の推進	参加のポジティブな効果
学校が地域の中心になっている	.299*	.084	.172
学校は行きやすい場所である	.308*	.118	.173
学校にはよい教師が多い	.158	.202	.126
学校には良い生徒が多い	.293*	.115	.090
学校の取り組みに満足している	.259*	.174	.223

*p<.05

Table 7 地域ボランティアと教師の学校への期待の平均値と t 検定結果

	地域ボランティア	教師	t 値
生徒指導への期待	3.750 (.460)	3.655 (.483)	.956
学習指導への期待	3.778 (.418)	3.759 (.435)	.212
進路指導への期待	3.716 (.454)	3.586 (.568)	1.252
部活動への期待	3.656 (.478)	3.482 (.574)	1.610
危機管理への期待	3.614 (.535)	3.069 (.530)	4.769***
地域との連携への期待	3.620 (.510)	3.448 (.632)	1.486

***p<.001

Table 8 地域ボランティアと教師の学校への評価の平均値と t 検定結果

	地域ボランティア	教師	t 値
学校が地域の中心になっている	2.241 (.862)	3.241 (.511)	5.900***
学校は行きやすい場所である	2.533 (.889)	2.786 (.499)	1.430
学校には良い教師が多い	3.000 (.660)	3.414 (.501)	3.063**
学校には良い生徒が多い	2.911 (.624)	3.138 (.693)	1.623
学校の取り組みに満足している	2.892 (.644)	3.138 (.639)	1.776

p<.01 *p<.001

ボランティア参加による変化と学校への評価の関連を検討するため、ピアソンの相関係数を算出した。その結果をTable 6に示す。「地域と中学生の変化」と「学校が地域の中心となっている」($r=.299$, $p<.05$), 「学校は行きやすい場所である」($r=.308$, $p<.05$), 「学校には良い生徒が多い」($r=.293$, $p<.05$), 「学校の取り組みに満足している」($r=.259$, $p<.05$)の間に有意な正の関連が認められた。以上の結果から、地域と中学生の変化を感じている者ほど、学校が地域の中心になっており、学校は行きやすい場所だと感じており、学校には良い生徒が多いと感じていることが明らかとなった。したがって、地域と中学生の変化を感じている者ほど、学校への評価が高くなり、学校が身近なものになっているといえる。

地域ボランティアと教師の意識の違いについて地域ボランティアと教師の意識の違いについて検討するため、学校への期待、学校への評価、ボランティアへの評価、学校の取り組みへの認知を従属変数とした t 検定を行った。

学校への期待についての結果をTable 7に示す。「危機管理」($t=4.769$, $df=115$, $p<.001$)において地域ボランティアのほうが教師よりも有意に得点が高かった。この結果から、地域ボランティアは危機管理に対して期待しているといえ、このことは備前中学校が学校支援地域本部事業を行う前に荒れていたことが関係している可能性がある。

学校への評価についての結果をTable 8に示す。「学校が地域の中心になっている」($t=5.900$, $df=114$, $p<.001$), 「学校には良い教師

Table 9 地域ボランティアと教師のボランティアへの評価の平均値と t 検定結果

	地域ボランティア	教師	t 値
読み聞かせ	3.059 (.659)	3.379 (.622)	1.651
登下校安全	2.651 (.870)	3.793 (.412)	6.579***
環境整備	2.889 (.801)	3.690 (.471)	4.601***
学習支援	2.789 (.918)	3.724 (.455)	4.692***
部活動支援	2.667 (.516)	2.964 (.693)	注)
ゲストティーチャー	2.800 (1.095)	3.370 (.565)	注)

***p<.001

注) 部活動支援とゲストティーチャーについては、参加した地域ボランティアのNが10以下であったため、t 検定を行わなかった

が多い」(t=3.063, df=106, p<.01)において教師のほうが地域ボランティアよりも有意に得点が高かった。この結果から、教師のほうが学校に対して楽観的な評価を行っているといえる。

ボランティアへの評価についての結果を Table 9 に示す。「登下校安全」(t=6.579, df=70, p<.001), 「環境整備」(t=4.601, df=54, p<.001), 「学習支援」(t=4.692, df=46, p<.001)において、教師のほうが地域ボランティアよりも有意に得点が高かった。なお、「部活動支援」「ゲストティーチャー」において参加した地域ボランティアの人数が10人以下であったことから、t 検定は行わなかった。以上の結果から、教師のほうがボランティアに対して高い評価を行っていたが、地域ボランティア、教師ともにボランティアに対して評価していることが明らかとなった。ただし、本稿の中では触れていないが、調査の中で行った自由記述の結果を勘案すると(時岡・大久保・福圓・平田, 2010), 地域ボランティアの方々には本気で取り組んでいる分、自分たちの活動に不満を感じているとも解釈できるといえる。

学校の取り組みの認知についての結果を Table 10 に示す。生徒指導の「生徒の起こす問題に対して毅然とした態度で対応している」(t=2.000, df=82, p<.05), 「生徒の起こす問題に対して見て見ぬふりをしない指導を行っている」(t=2.114, df=81, p<.05), 「生徒の起こす問題に対してすばやく対応している」(t=2.046, df=77, p<.05), 「教師はどの生徒に

も公平に対応している」(t=2.161, df=63, p<.05), 「スクールカウンセラーを積極的に活用している」(t=3.776, df=57, p<.001)において、教師のほうが地域ボランティアよりも有意に得点が高かった。学習指導の「教師は生徒の基礎学力向上を目指した指導を行っている」(t=1.999, df=80, p<.05)において、教師のほうが地域ボランティアよりも有意に得点が高く、「地域の伝統や文化に関する教育を積極的に行っている」(t=2.929, df=79, p<.01)において、地域ボランティアのほうが教師よりも有意に得点が高かった。部活動指導の「ボランティアを活用して部活動支援を行っている」(t=3.669, df=86, p<.001)において、地域ボランティアのほうが教師よりも有意に得点が高かった。危機管理の「壊れたところはすぐに修理するなど環境の整備に気を配っている」(t=3.519, df=62, p<.01)において、教師のほうが地域ボランティアよりも有意に得点が高かった。地域との連携の「学校は保護者とのつながりを重視している」(t=4.201, df=83, p<.001)において、教師のほうが地域ボランティアよりも有意に得点が高かった。また、学校の取り組みについて地域ボランティアは知らないことも多く、特に進路指導に関しては半数以上の地域ボランティアが学校の取り組みを知らないことが明らかとなった。以上の結果から、概して教師は非常に楽観的な評価をしており、学校の取り組みは教師が思っているほどは地域に伝わっていないといえる。

Table 10 地域ボランティアと教師の学校の取り組みへの認知の平均値と t 検定結果

項目	知っている	知らない	地域		得点	t値
	(%)	(%)	ボランティア	教師		
(生徒指導)						
生徒の起こす問題に対して毅然とした態度で対応している	60.8	39.2	3.02 (.805)	3.34 (.484)	2.000*	
教職員の中で共通理解をもって生徒指導を行っている	47.1	52.9	3.20 (.648)	3.31 (.660)	.692	
生徒の起こす問題に対して見て見ぬふりをしない指導を行っている	61.8	38.2	3.06 (.811)	3.41 (.568)	2.114*	
生徒の起こす問題に対してすばやく対応している	56.9	43.1	3.22 (.679)	3.52 (.509)	2.046*	
人権教育を熱心に行っている	46.1	53.9	3.25 (.630)	2.93 (.753)	1.912	
教師はどの生徒にも公平に対応している	46.1	53.9	3.06 (.630)	3.38 (.561)	2.161*	
スクールカウンセラーを積極的に活用している	40.2	59.8	3.07 (.691)	3.66 (.484)	3.776***	
(学習指導)						
生徒の興味・関心を高める魅力ある授業を行っている	36.3	63.7	3.10 (.772)	3.04 (.508)	.390	
特別支援教育を重視している	45.1	54.9	3.11 (.809)	3.45 (.506)	1.979	
教師は生徒の基礎学力向上を目指した指導を行っている	60.8	39.2	3.19 (.557)	3.45 (.572)	1.999*	
時間外でも学習指導を熱心に行っている	48.0	52.0	3.17 (.730)	3.17 (.711)	.033	
学習支援ボランティアを積極的に活用している	84.3	15.7	3.51 (.599)	3.62 (.494)	.916	
読書指導を熱心に行っている	52.0	48.0	3.23 (.527)	3.28 (.702)	.299	
地域の伝統や文化に関する教育を積極的に行っている	60.8	39.2	3.17 (.760)	2.66 (.769)	2.929**	
(進路指導)						
生徒が定期的に進路について考える機会を設けている	36.3	63.7	3.11 (.786)	3.00 (.544)	.593	
生徒の高校合格率を高めるような指導をしている	59.8	40.2	3.10 (.707)	3.31 (.604)	1.342	
生徒が上位の高校に合格することを目標とした指導をしている	47.1	52.9	2.88 (.791)	2.62 (.677)	1.399	
進路相談を熱心に行っている	41.2	58.8	3.15 (.657)	3.24 (.739)	.536	
生徒の適性に合った進路指導をしている	45.1	54.9	3.14 (.673)	3.21 (.559)	.462	
生徒の卒業後も考えた進路指導をしている	40.2	59.8	3.07 (.640)	3.34 (.670)	1.632	
進路に関する相談を頻繁に行っている	37.3	62.7	3.07 (.730)	2.83 (.658)	1.329	
(指導)						
部活動が盛んに行われている	79.4	20.6	3.45 (.668)	3.45 (.632)	.026	
部活動で生徒が活躍している	83.3	16.7	3.34 (.644)	3.48 (.574)	1.030	
生徒は部活動で使用する施設や道具を大切にしている	49.0	51.0	3.08 (.682)	2.79 (.675)	1.710	
部活動に対して顧問が熱心に指導している	56.9	43.1	3.31 (.683)	3.45 (.632)	.913	
部活動に対して保護者の十分な協力や理解が得られている	51.0	49.0	3.02 (.740)	3.14 (.639)	.681	
部活動ではあいさつやマナーなど技術以外の生活面での指導をしている	58.8	41.2	3.14 (.729)	3.34 (.553)	1.310	
ボランティアを活用して部活動支援を行っている	69.6	30.4	3.25 (.856)	2.54 (.838)	3.669***	
(危機管理)						
生徒の安全面に気を配っている	82.4	17.6	3.29 (.653)	3.28 (.649)	.123	
緊急時の訓練や対策を熱心に行っている	35.3	64.7	2.92 (.628)	3.14 (.789)	1.109	
生徒の個人情報取り扱いに配慮している	49.0	51.0	3.42 (.636)	3.38 (.622)	.297	
警察や地域と連携して危機管理に努めている	62.7	37.3	3.38 (.562)	3.59 (.501)	1.669	
壊れたところはすぐに修理するなど環境の整備に気を配っている	45.1	54.9	3.00 (.642)	3.52 (.509)	3.519**	
校内の安全管理に努めている	63.7	36.3	3.32 (.581)	3.28 (.649)	.321	
緊急時の対応についての体制が整っている	40.2	59.8	3.06 (.629)	3.17 (.539)	.711	
(地域との連携)						
学校は保護者とのつながりを重視している	57.8	42.2	3.29 (.713)	3.59 (.501)	1.949	
学校の情報を地域に積極的に公開している	63.7	36.3	2.66 (.940)	3.45 (.506)	4.201***	
地域の人材を積極的に活用している	79.4	20.6	3.46 (.580)	3.59 (.628)	.979	
教師が地域行事に積極的に参加している	52.0	48.0	2.62 (1.03)	2.79 (.675)	.790	
地域文化の継承を手助けしている	61.8	38.2	3.21 (.706)	3.00 (.756)	1.295	
施設を地域に積極的に開放している	64.7	35.3	3.04 (.852)	3.21 (.559)	.977	
生徒が地域行事に積極的に参加している	83.3	16.7	3.07 (.736)	3.28 (.649)	1.349	

† p<.01 *p<.05, **p<.01, ***p<.001

まとめと今後の課題

本研究の目的は、荒れている中学校の学校支援地域本部事業の取り組みの成果について、生徒・地域ボランティア・教師の意識調査を通して、学校と地域にどのような変化が起きたのか

を検討することであった。その結果、学校支援本部事業により、荒れていた学校が変わった可能性があること、ボランティアに参加したことで学校に期待し始め、地域住民も変わったこと、地域と学校の距離が近づいたこと、地域ボランティア、教師ともに評価していること、地

域ボランティアと教師の間に温度差があることが明らかになった。

今後、事業を効果的に進めていくためには、地域ボランティアと教師の間の温度差を解消していくことや一部の住民だけでなく地域全体を巻き込んだ活動にしていくことが必要になるといえる。そのためにも、取り組みの継続が重要になるといえる。また、今後の効果的な取り組みを考えると、参加したボランティア間の温度差や教師間の温度差などを埋め、これらを調整するコーディネーターの役割も含めた組織構造についても検討していく必要があるだろう。

本研究では、荒れた学校を対象に学校支援地域本部事業の効果を検証してきたが、学校支援地域本部事業を行えば学校の荒れが解決すると結論付けることは、あまりにも早急であるといえる。ただし、地域住民というこれまで学校とは無関係だった人たちが学校に関わることで、教師自身の指導のあり方を見直すことが促進される可能性もあることから、教師が視野を広げるという意味で有効な対策として位置づけられるかもしれない。学校が疲弊していることから、地域に教育のリソースを求める動きは今後も加速していくことが予想され、今後、さらに荒れている学校での本事業の効果を検証していく必要があるといえる。

引用文献

- 加藤弘通・大久保智生 2004 反学校的な生徒文化の形成に及ぼす教師の影響：学校の荒れと生徒指導の関係についての実証研究 季刊社会安全, 52, 44-57.
- 加藤弘通・大久保智生 2009 学校の荒れの収束過程と生徒指導の変化：二者関係から三者関係に基づく指導へ 教育心理学研究, 57, 466-477.
- 本迫庸平 2009 学校支援地域本部の教育活動に関する一考察 東京大学大学院教育学研究科紀要, 49, 105-114.
- 中川忠宣・山崎清男・深尾誠 2010 「学校支援」についての保護者と住民の意識の相違に関する一考察 大分大学高等教育開発センター紀要, 2, 49-67.
- 萩野亮吾 2010 学校—地域間関係の再編の動態についての「社会関係資本」の観点からの考察：大分県佐伯市の学校支援地域本部事業を事例として 生涯学習基盤経営研究, 34, 41-56.
- 大久保智生 2009 学級集団づくり 心理科学研究会(編) 小学生の生活とこころの発達 福村出版 60-72.
- 大久保智生・加藤弘通 2008 問題行動の経験と規範意識による生徒の類型化とその特徴 心理科学, 29, 96-103.
- 時岡晴美・大久保智生・平田俊治・福圓良子 2010 学校支援地域本部事業の取り組み成果報告書：岡山県備前市立備前中学校における調査結果から 香川大学
- 時岡晴美・大久保智生・平田俊治・福圓良子・江村早紀 2011 学校支援地域本部事業の取り組み成果にみる学校・地域間関係の再編(その1)：地域教育力に注目して 香川大学教育実践総合研究, 22, 129-138.